

無力な神を助ける—コロナ禍に期待されること

天使大学 学長 田畑 邦治

前号(29号)で、私は「天使に招かれて——本学の源泉に汲む」の最後に、「天使の三つのつとめ」についてのシスター土屋淑子の一文(『天使病院75周年記念誌』昭和62年)を紹介しました。興味深いものでしたので、もう一度そのことに触れたいと思います。シスターが挙げた天使の「第三のつとめ」は、「困難や危険にある人を助けること」ですが、聖書の中から、受難のキリストを助けた天使のことを例として出します。



「ルカ福音書には、キリストが受難の前夜、ゲツセマネの園で血の汗を流し、もだえ苦しみながら祈られた時、天使が来てかづけたと記しています。被造物である天使が、創り主である神、キリストに力をお貸ししたとはどういうことなのでしょう。キリストはなぜそれほどに無力になられたのでしょうか。病む人、苦しんでいる人の中に神がおられることを知ってほしいという神の切なるおのぞみをこうして示されたのではないのでしょうか。」

私はこの文章の含蓄の深さに感銘します。ここには天使論だけではなく、私たちの、宗教や「神」についての常識を超え出るヒントがあるからです。宗教や神仏を考える時、私たちは主として、それが私たちにとってどういう助けになるのか、ということの問題にします。いわゆる「困ったときの神頼み」にそれが顕著です。キリスト教でも、この種の神頼み、神信仰が禁じられているわけではありません。むしろ、聖書にも「助けて下さい」という人間の叫びが満ち溢れ、ついには「救い主」「助け主」を待ち望むのです。

しかし時満ちて、聖書には、「天使や人間の助けを求める神」という逆説が登場するのです。キリストの生涯を見ても、もちろん、人を助ける場面もたくさんあるのですが、最後には、自分を救うことのできない無力な人間として、十字架の上で呪われたように息絶えるのでした。

また、イエスの教えの最も斬新なところは、シスターが書かれたように、「病む人、苦しんでいる人の中に神がおられる」ということでしょう。この教えから、私たちは、ただ神にお願いするだけではなく、身近にいる隣人、とりわけ病み苦しんで人を自ら助けることによって、助けを求めている神をお助けするよう期待されているのです(マタイ福音書25・31-46参照)。この態度変容は大きなことで、こうして私たちは、自己中心(依存)の宗教心から他者に対する責任を生きる「成人としての宗教心」(E.レヴィナス)に成長するのだと思います。

今このことに思いを寄せたのは、宗教についての理解が、近代人の主体的な生き方や倫理観に反する、幼見的・依存的なものであって、時代遅れである、という考えが支配的だからです。しかしながら、主体的な生き方と宗教が教える生き方はそのように二者択一的なものでしょうか。

私たちが「主体的に」生きるといったところで、私たちは何か特段に有力な助け手であるというわけでもありません。人間はどこまでいっても幼子のように無力なものであって、それゆえ幼子のような寄り頼む宗教心も悔えることはできません。イエスご自身、彼が「父」と呼ぶ神の前に幼子のような方でしたが、その子どものような態度から驚くべき活動性が生まれたのでした。



Title: "An angel comforting Jesus before his arrest in the Garden of Gethsemane"
 Artist: Carl Bloch (1834-1890)
 Collection: The Museum of National History in Denmark
 Free Christ Images (<http://freechristimages.org/>)

「わたしの父は今に至るまで働いておられる。だからわたしも働いている。……子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができない。父がなさることは何でも子もまた同様に行うのである。」(ヨハネ福音書5・17-19参照)

さて、現在私たちがおかれているコロナ禍の状況は依然として先の見えない暗い道ですが、無力ながらも私たちに今できることはないのでしょうか。

昨年月寒カトリック教会でのクリスマス・ミサで、本学の指導司祭でもあるケン・スレイマン神父は、「偶然かもしれないが」とされながら、「コロナ」はラテン語で王冠を意味するが、イエスは迫害者から「侮蔑の王冠」である「茨(いばら)のコロナ(冠)」をかぶせられた、と言われました。

コロナ禍で苦境にあるすべての人と「茨のコロナ」をかぶったイエスは一体となっておられる、と信じることができるかもしれません。それこそは自分を救えない「無力」な「王」ですが、イエスと人々の王冠から一本の「茨」(屈辱と苦痛)でもお取りして差し上げることが私たちに期待されていることかもしれません。

研究室訪問

2020年度から新しく天使大学に入職された教員の皆様に自己紹介を兼ねて、ご専門を執筆していただきました。

心臓病患者のその人らしい生活を支える研究

看護学科教授 服部 容子

2020年4月に看護学科に着任し、基礎看護学を担当しています。天使大学と関わりを持つのは今回の着任で3度目となり、深いご縁を感じています。1度目は天使女子短期大学時代の学生として看護の基本を育てて頂きました。2度目は短大から大学へ改組転換された2000年頃に基礎看護学の助手として演習や実習に携わり、教へ・学ぶことの楽しさを教わりました。2005年には大学院進学のため退職し、関西で看護研究に取り組みながら教員生活を14年ほど送り、改めて天使大学との再開に至ったところで。久しぶりに訪れた大学には新棟が建ち、学生定員が増えて刷新された印象を受けた一方で、マリア像の横には生花が置かれ、訪れる人を和ませる温かみがか受け継がれ、時を経て変わらない様子になぜかホッとする気持ちになりました。



手がけてきた研究テーマは主に2つあり、一つは、基礎看護学で担当する技術教育に関連して看護実践能力を高める教育方法について検討しています。もう一つは、循環器病院での臨床経験と関連して心臓病患者の療養生活支援についての研究です。いずれも科学研究費を活用して成果報告をしています。心臓病患者の療養生活支援に関する研究は大学院の修士・博士課程で研究の基本に立ち返りながら深めてきました。この研究を始めるきっかけは、病院勤務時代に、狭心症や心筋梗塞などの心臓病から回復しても心機能の低下により今まで通りの生活を営むことが難しくなり、心臓に負荷をかけない生活を余儀なくされる人が多くいること、退院できても日々の体調管理がうまくいかないと心不全の増悪となり再入院に至ることが多くあり、この状況に看護師として何ができるのか、と疑問を持ったことでした。心臓病の悪化と再入院のリスクを抱えながらご自宅で生活する方々にインタビュー調査を行い、どのように自己の状況を認識したり、症状の悪化を自覚し対処しているのかを語って頂き、当事者の入退院の経験から再入院予防ならびに退院後の生活の質を高めるための自己管理方法を抽出して、心不全患者のセルフモニタリング(自己管理の様相)を概念分析としてまとめました。また、看護師が患者のセルフモニタリングの様相を見極め、支援に役立てるための評価尺度も開発しました。開発した尺度を独自のホームページで公開したところ、同じ患者支援に携わるナースより問い合わせを受け、利用して頂いていますが、より簡便な尺度に改善することを課題として今後も取り組んでいます。心臓の病気を患うと活動を抑制した生活になりがちですが、適度な活動は血圧上昇を緩やかにし心臓の予備力を保つ上で重要であり、セルフモニタリングという知識がその人らしい生活を送る一助になればと思います。研究を継続中です。そして、研究を通して培った、今置かれている状況で何ができるかを考えた、できることをやってみようという前を向く力を学生たちと共有し、困難に直面してもへこたれない看護師を育てていきたいと思っています。



地域の環境や文化と子どもの体格に関する研究

看護学科助教 高橋 彩華

私は、天使大学を卒業後、自身の出身地であり第一次産業中心の町である「浜中町」で、保健師として勤務しました。その後、いつか母校で働きたいという思いを抱き、天使大学大学院(看護栄養学研究科看護学専攻公衆衛生看護学コース)の修士課程を修了しました。大学院修了後は、2018年に発生した胆振東部地震の被災地でもある「厚真町」で保健師として活動し、2020年4月に天使大学の教員となりました。

第一次産業中心の町で保健師活動を行う中で、農業や漁業に従事する方に、肥満や高血圧、糖尿病などの生活習慣病が多いことを感じていました。また、農業や漁業に従事する家庭の子どもに肥満が多いという課題も明らかになりました。そして、その背景には、車移動中心の生活や、週末に食料品を大量にまとめ買いする習慣、農業や漁業従事者特有の休憩中の間食習慣など、農漁村地域の環境や生活習慣が関係しているのではないかと考えていました。

そこで、大学院では北海道内に住む幼児を育てる保護者を対象に、質問紙調査を行いました。その結果、人口の多い都市地域に比べ、農漁村地域に住む子どもに肥満が多いことが明らかになりました。また、都市地域に比べ、農漁村地域では母親が就労していたり、祖父母と同居している家庭が多いという家庭環境の違いがみられました。さらに、農漁村地域では、おやつやテレビの時間が決まっていない、睡眠時間が短いなど、都市地域と農漁村地域では子どもの生活習慣に違いがあることが明らかになりました。

この研究では、住んでいる地域によって家庭環境や生活習慣の違いがあることが明らかになりました。しかし、これらの違いは、子どもの肥満に直接影響を与えている要因ではありません。地域によって異なる気候や産業特性、文化や価値観、住民同士のつながりなどが、家庭環境や生活習慣の地域差につながっていることが考えられます。そのため、今後は複雑に関係するこれらの背景を含め、多方面から検討する必要があります。子どもの頃の体型は、その後の体型や生涯の健康に大きな影響を与えます。子どもへの肥満予防・改善へ向け、地域の特性に合わせた保健活動の展開につながるよう、研究を続けていきたいと思っています。

また、災害を経験した保健師として、災害後の住民の生活や心の健康に対する支援、平常時からの地域の取り組みなどについても関心があります。防災現場にいたからこそ感じられた経験を活かし、災害看護について学生とともに学びを深めていきたいと思っています。



子どもの育ちと健康、権利を守る研究

看護学科教授 日沼 千尋

私は大学卒業以来、45年間絶えることなく小児看護の臨床、教育、研究の場で仕事をしてまいりました。臨床は主に手術を受ける子どもが入院する外科系の病棟と手術室で15年ほど勤務し、その後は看護教育をしながら研究する生活でした。小児看護を選んだのは、子どもが好きというより、小児看護の領域には外科系も内科系もあり、対象は未熟児から思春期まで幅広く複雑で、とても難しいけど子どもに教えられたり試されたり、とにかく興味深く面白かったからです。大学時代に小児看護を、論理的に教授して下さる恩師に出会えたことも大きかったと思います。小児看護は可能性が大きく論理的で面白いと思いました。

その後、看護を実践していく中で、小児医療の急激な発展とともに、次々と子どもたちからたくさん新たな課題が突き付けられたように思います。その一つが子どもの臓器移植にかかわる看護と体制整備の問題です。私の臨床経験の中で、臓器を移植しなければ助からないお子さんや、海外で心臓移植をして元気になったお子さんにも何度か出会いました。一方で、ほとんど脳死状態といわれながら、皆に大切に看護されて少しずつ大きくなっているお子さんの看護もしてきました。2010年日本の臓器移植法を改正して、保護者からの代話のもと、子どもからの臓器提供を可能にするという法案の検討に国中が大議論していた時、たまたま日本小児看護学会の理事長として見解を発表するという機会を経験いたしました。今でもその時に様々な子どもとご家族のお顔を想い浮かべながら、子どもの最善の利益とは何かと、悩み苦しんだこと、看護の代表として法案に意見を述べることに震えたことを思い出します。それ以来、厚生労働省の委託を受けて子どもの臓器移植や臓器提供体制整備にかかわる研究班の一員として、研究を続けております。私自身は臓器移植を積極的に推進する立場というより、国が法改正をして子どもの臓器移植を進めると決定した以上は、臓器を提供することになる子ども、臓器移植を受ける子ども、どちらの権利もしっかり守られるための看護を確立することが、私たちの使命だと考えて研究に取り組んでいます。

現在は、不幸にして脳死状態に陥り、臓器を提供する子どもとご家族の看護について研究しています。この研究の中でだんだん分かってきたことは、臓器提供をする子どもの看護は特別な看護ではなく、丁寧に子どもと家族のナラティブ(生きてきた物語)に耳を傾ける看護の看護だということです。命への尊厳と畏怖を忘れず、子どもと家族に寄り添っていきたくと思います。2020年春にご縁があって天使大学に着任して、最初に頂いた「命へのまなざし」に「脳死と臓器移植」としてカトリック教会の臓器移植に対する考え方が明確に記載されていて、感慨深く読みました。

天使大学の「愛をとおして真理へ」の建学の精神を胸に、最新の知見を活用しながら、より良い教育を小児看護学の先生方とともに、展開してまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



学生の成長と共に

助産研究科助教 杉田 樹美

私は、天使大学卒業後、天使大学大学院助産研究科を修了しました。大学院修了後はこれまで病院で勤務しており、臨床実習指導者として学生と関わってきました。昨年からは天使大学大学院助産研究科の教員となり、現在は主に臨地実習を担当し、学生と共に様々な実習施設に行っています。天使大学大学院助産研究科では、2年という期間の中で、専門職大学院として実践能力の高い人材の育成を目指しており、他の助産学校よりも実習期間が長期にわたります。助産実習では、実際の分娩介助を行うため夜間のオンコールを含め、病院実習や助産院実習など様々な場で臨地実習を行います。病院実習では、主に妊娠期・産産期・産褥期にある対象との関わりを通し、様々な学びを得ています。学生が、初めは緊張と不安の中で戸惑いながらも、臨床指導者からの指導を受け、対象と関わり、既習の知識・技術・態度を統合し成長していく姿をみてきました。

学生が、臨地実習だからこそ経験することができることは、多岐にわたります。特に分娩介助実習での、その場での判断と助産技術の実践には臨地実習が重要です。教員として、その実践について振り返りフィードバックし、不明点や今後の課題を明確にしながら学生が学びを深めてくことができるように関わるのが重要であると思っています。また、実習指導では、実習指導内容や実習環境の調整など臨床指導者との連携が重要です。実習指導者とともに学生のレディネスや個性性を共有し、学生一人一人に合わせた実習目標達成にむけた関わりが大切だと考えます。これらの臨地実習での学び・経験は、専門職業人としての実践能力を高めるために必要であると考えます。

本年度は、新型コロナウイルスの影響で、授業は遠隔となり、病院実習を学内実習に変更するなどイレギュラーなことばかりでした。予定していた実習施設での実習期間短縮や中断もある中で、一部の施設で臨地実習を行っています。このような環境の中で、学生の実習したいという強い思いも実感しました。学生が、臨地実習という貴重な場で学びを深めることができるように、教員として、私自身も学びたいと思っています。



看護実践を通しての研究

助産研究科 助教 長田 雅子

昨年の4月より入職しました助産研究科の長田雅子です。私は、助産師、看護師として、病院や地域での助産・看護(訪問舎)活動を行ってきました。また、看護基礎教育にも従事し、この中では、母性看護学ならびに在宅看護論を中心に講義や実習に携わってきました。この教育活動の中で学生への関わりを振り返り、自分自身もう一度学びなおしを行う必要性を感じ、大学院へ進学しました。

私の行った初めての研究は、病棟病院長や先輩のスタッフより指導を受けながらインタビュー調査を行うものでした。この研究は、胎児の状況に関連した妊婦の心理過程を明らかにし、ケアにいかしていくという内容でした。次に、出生前診断を受けた妊婦に対する研究を行い、ケアの重要性を明らかにしました。これらの研究は、進められていくにつれて関心が深まっていき、研究を実践に結び付けることができたと考えています。

修士論文は、対象を看護者とし、感情と看護ケアとの関連について調査しました。この研究から、看護者は看護実践を通してケアの意味付けや価値を見出していることが分かりました。また、この修士論文を作成する中で、私たち専門職の自らの視野を広げる必要性を再認識しました。

現在は、助産研究科の一員として、天使大学特別研究費の助成を受け、助産師さんへのインタビュー調査を行っています。この内容を質的に分析し、助産ケアの実際や助産師の思いや大切にしていること等を明らかにし、助産師を目指す院生、学生や多くのおみなさまへお伝えできればと考えています。

このたびご縁があり、天使大学へ入職しまして 現在まで、Zoomによる遠隔授業をはじめ、様々な“初めて”を経験しました。この経験もこれからの実践のさまざまな場で生かしていきたいと思えます。コロナ禍の影響を受け大変な状況ではありますが、実習をさせていただき、院生へ直接関わる機会を多くもつことができました。院生が対象に寄り添い、自ら思考しケアを実践できるように支援し、成長を見守っていきたくと思います。さらに、授業・研究、さまざまな活動を行っていきたくと考えていますので、今後とも どうぞよろしくお願いいたします。



現在までの経験を活かして

栄養学科助手 金吉 美歩

私は天使大学の栄養学科を卒業後、給食委託会社に就職し、病院や高齢者住宅の給食管理をしていました。

患者さんや利用者さんに喜んでいただけたこと、食事の提供を大切にすることと同時に、厨房の調理師さん、調理員さんが働きやすい環境を整えることが給食委託会社の管理栄養士にとって重要な役割であったと思います。

事務的な業務はどの施設でもほぼ同じですが、食事の内容や提供の仕方は施設によって全く異なります。私が管理栄養士として担当した施設は3箇所でしたが、別の施設を見学することや、ヘルプとしてお手伝いに行く機会もありました。同じ会社に勤めながら複数の現場を経験し、目にするのができたことは、新卒で給食委託会社に就職して良かったと思うことのひとつです。

その後、食品会社で流通後の商品を分析する品質保証の仕事もしました。学生の頃に実験をしていたときには、顕微鏡を扱う検査や、微生物検査をする仕事に就くと思いませんでしたが、大学で学んだことはすべて経験となり、職業の選択肢が広がっていることを実感しました。

そして、今年度から栄養学科の助手を務めています。助手としての業務は遠隔授業のサポートから始まりましたが、現在は対面での授業が増え、しっかりと感染対策をして実験・実習を行っています。

私は主に食品科学実験などの実験の助手を担当しており、助手として1年目の今年度は、授業前に自分で実験して手順と結果を確認しています。学生の頃に同様の実験をしているので、当時のことを思い出しながら、使用する器具や試薬を準備しています。コロナ禍での実験は、例年2クラスで行う実験を4クラスに分けた少人数で行い、実験時間も約半分です。短い時間でも無事に実験が成功するよう、先生と相談して工夫しています。

学生の頃、私は大学の教職員の皆様に支えられていたとき、管理栄養士になることができた。今度は私が今までの経験を活かし、学生の皆々を支える立場として、私自身も成長していきたいと思っています。



臨床現場から教育研究分野へ

栄養学科准教授 坂本 洋子

昨年4月より入職いたしました栄養学科の坂本洋子です。専門は給食経営管理論でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は短大を卒業後、精神科、消化器内科、循環器内科と約35年間病院の栄養士・管理栄養士として勤務しておりました。栄養士として活動していた頃は、献立作成・発注・調理・配膳前の食事チェック・在庫管理等の給食管理を担当し、献立作成の方法は先輩管理栄養士から学び、調理や食材に関することは年配調理員から手ほどきを受けました。この時期に学んだことは実践的なことが多く、授業にも役立っております。管理栄養士の免許取得後は、個人栄養指導、在宅訪問栄養指導を行い、病院側と給食委託会社との仲介役を務め、コミュニケーションスキルを身に付けました。在宅訪問栄養指導では、若輩の管理栄養士が人生の先輩方に対して調理方法や食べ方を指導することは患者やご家族に受け入れられるのか、不安な気持ちで患者宅に向かったことを記憶しております。管理栄養士として活動していた頃は、NST(Nutrition Support Team)の立ち上げが始まり栄養管理の業務プロセスの構築、個人栄養指導、健康料理教室を中心とした集団栄養指導、特定保健指導を行い、管理職として他職種・業者との対応、管理栄養士の育成に務めました。その他地域、企業を対象とした講演会の講師や企業とコラボレーションした減塩食品の開発に携わってまいりました。

学外臨地実習では天使大学の学生の受け入れを行っていました。臨床の中で栄養管理は重要視されています。病院の管理栄養士になりたいからと栄養管理ありきという姿勢で臨む学生もいましたが、私は必ず「給食管理ができない者は、栄養管理はできない」と伝えておりました。学生には、一般食・治療食をいかにおいしく、PDCAサイクルに則り栄養・食事管理のできる管理栄養士が必要であること、また臨床は栄養管理とともに給食管理がいかに大切であることも理解してほしいという願いがありました。天使大学の学生は、よい学びをしていると感じておりましたが、学生連に私の長い臨床経験を通して、さらに深く学んでほしいと数年前から考えるようになり、教育研究分野を目指すきっかけになりました。

研究については、臨床にいた経験から実践的な健康料理教室の指導の効果、減塩による食事療法、危機管理、食事調査等について取り組んでまいります。

管理栄養士は、栄養・食事について正しい知識を持った上で、相手に納得してもらい、行動の変化につなげられる管理栄養士になるためには、「聴く力」「考える力」「説明する力」をつけることが必要であり、基礎教育の上に実践的な力が求められています。日本栄養改善学会で検討された管理栄養士コア・カリキュラムを踏まえつつ、教育効果を高め、臨床の実務経験を生かした実践につながる管理栄養士の育成に努めてまいります。



薬局勤務の経験をいかして

栄養学科助手 高橋 咲

私は、天使大学に入学後、授業や実習、サークルやボランティア活動等、大学時代の様々な経験を通して、将来、管理栄養士として未病の段階で地域住民の健康保持増進に貢献するという目標が出来ました。今となって思い返してみると、当時は、ただ漠然と、地域住民の健康保持増進に貢献する管理栄養士になりたい、と考えていたような気がします。

その目標に向かっての第一歩として、大学卒業後、調剤薬局での勤務を始めました。薬局には病気の有無に関わらず、子ども～高齢者まで幅広い年齢層の方が来局します。業務内容としては、生活習慣病など様々な疾患を持つ方、妊産婦、子どもや働く世代など、対象に合わせた栄養相談、レシピや資料の作成、講演会などがあります。業務を通して、ご高齢の方の独居、若い世代のやせ志向、働く世代の食生活改善の難しさなど、生の声を目の当たりにし、自分の力不足を痛感しました。そして、薬局での業務を通して、自分に足りないこと、自分の目標に近づくために必要なことが少しずつ見えてきました。地域住民の健康保持増進についても世代や個人によって課題は異なります。一人ひとりに寄り添った栄養相談をするためには、基礎的な知識に加えて、幅広い知識が必要であること、自分の専門分野を持つことで対象を絞り、より踏み込んで管理栄養士として関わるができるということ、薬局での経験をj通じて実感しました。

基礎知識を改めて勉強し基礎を固め、新たな知識の習得、食材管理の経験を積みたいという考えから、ご縁もあり母校である天使大学で勤務させて頂くこととなりました。大学では調理実習の助手を主として担当しています。その他にも、微生物学実験や形態機能学実習など様々な分野の授業に関わっています。食材管理、衛生管理など、授業内容は、管理栄養士として働く上で大切な知識や技術となります。大学時代に学んだことの再確認、また新しい視点から授業に携わることができ、様々な発見や学びがあります。5年後には、自分の専門としたい分野が明確になり、目標の実現ができる場所や手段が具体化できるよう、今ある環境や人とのつながりを大切に、学び続けていきたいと思っています。



2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大予防のため様々な式典・行事が中心、延期、簡略化されて行われました。その中でも特に専門職への誓いの式典として印象深い「戴帽式」、「Food and Life Step-up Ceremony」について卒業していく4年次生から2年次生へお祝いのメッセージを執筆していただきました。

戴帽式お祝いメッセージ（看4から看2へ）

人生に無駄な経験は1つもない



看護学科4年
加藤 優里

2年生の皆さん、戴帽おめでとうございます。戴帽式は延期となっておりますが、入学してから2年間、辛い実習やテストなどを乗り越えてここまでこられたことに、心よりお祝い申し上げます。

2年生という、何もかもが初めてだらけだった1年生を終え、大学での講義や生活リズムにも大分慣れ、高校生とは違う大学生らしい生活を楽しむことができるようになる学年だと思います。しかし、今年は新型コロナウイルスの影響があり、やっと慣れてきた生活スタイルが変わってしまったり、旅行や成人式等楽しみにしていたことが次々と無くなってしまい、がっかりしている方も多いと思います。しかし、3年生後半からは、就職活動や国家試験勉強などで忙しくなるため、まだ時間に余裕のある今のうちに、なかなか会う機会のない友達とズームなどで話したり、映画や本をたくさん見たりして、社会人になる前のこの時間を思いっ

り楽しんでほしいと思います。私は、人生に無駄な経験は1つもないと思っているので、この新型コロナウイルスによるつらい経験も、いつか役に立つ時が来るのではないかと考えます。

2年生の後期にある皆さんは、3年生から始まる各論実習や就職活動、4年生の卒業研究や国家試験が待っていることに、不安を感じている人も少なくないのではないかと思います。私も2年前の頃は、本当に乗り越えていけるのか、卒業までたどり着けるのかという不安でいっぱいでした。しかし、代々の先輩方も乗り越えてきたことですし、本当に何とかあります。確かに辛いこともたくさんありますが、3、4年生は忙しくてあっという間に時間が過ぎるので、今まで様々なことを乗り越えてきた自分を信じて頑張ってください！



学びを振り返り自分自身の成長を実感してほしい



看護学科4年
坪田 みのり

2年生の皆さん、戴帽おめでとうございます。戴帽式という貴重な式典で皆さんをお祝いできなかったこと、非常に残念に思います。学生生活は折り返しの時期になりますが、これまでの2年間を振り返り、どのような学びがあったでしょうか。今年度は新型コロナウイルス感染症により臨地実習や授業などに多くの制限が設けられ、思うような学習ができなかったかと思

います。しかし、限られた時間の中でもたくさんのことが学べたのではないかと思います。ぜひこれまでの学びを振り返り自分自身の成長を実感してほしいと思います。私は小児看護に携わりたいと思い、幼い頃から看護師を目指してきましたが4年間を通し、現在は在宅看護や慢性疾患を抱えた患者さんに携わる看護師になりたいという目標が変わりました。私の目標が変わるきっかけとなったのはこれまでの講義はもちろんですが、在宅で生活をしている方のケアを行うアルバイトを始めたことが大きく影響しています。その方は人工呼吸器をつけており、訪問看護によるケアが毎日必要で

すが看護によって患者さんの家で暮らしたいという思いを実現する手助けができるということを改めて考える機会となり、在宅看護に興味を持つようになりました。私が自分自身の学生生活を振り返り皆さんにお伝えしたいことは、様々なことに興味をもち、たくさんの人との出会いを大切にしてほしいということです。私は明確な目標を持つことができたのは4年生になってからのことで、2年生の頃にはなぜ自分は看護師を目指したのだろうか、と思うこともありました。残りの学生生活でのグループワークやアルバイト、サークルなどで様々な人と話し、色々な考えを知ることにより新たな成長につながるのではないかと思います。これから大変なことはたくさんあるかと思いますが、仲間と助け合い楽しく過ごしてください。お互い目標となる看護師になれるように頑張ってください。



ステップアップセレモニーお祝いメッセージ（栄4から栄2へ）

なりたい管理栄養士像を実現するために



栄養学科4年
遠藤 真愛

2年生の皆さんは、ステップアップセレモニーを終え、今どのようなお気持ちでしょうか。自分自身を見つめ、管理栄養士への志を改めて確認するなかで、自分に不足している部分や今ある恵まれた環境への感謝の気持ちなど再確認できたと思います。

大学生活もあと少しで折り返します。大学生活や一人暮らしに慣れ、「2年生になったら色々なことに挑戦しよう!」とエネルギーに満ち溢れていたかと思えます。しかし、新型コロナウイルスの影響により、できることが限られ、やるせない日々が続いたと思います。限られた状況で、今できることを見出していくのは簡単なことではないと思いますが、近い将来、あの時の努力は無駄ではなかったと思えるような行動をしてほしいと思います。

私が2年生だったころは、どこでどんな管理栄養士になりたいのかを残りの2年で見つけられるか不安に思っていました。しかし、学外実習を通して現場で働く管理栄養士の姿を拝見し、自分がなりたい管理栄養士のイメージが明確になり

ました。実習では、実習先の先生からの教えを待つのではなく、自分から積極的に学ぶ姿勢を持つことが大切です。現場からしか学べないことがある貴重な実習が経験できるのを楽しみにしてください。

私は、4年生になり「卒業」の言葉を意識し始めました。学校の友達と他愛もない話で盛り上がり、一緒になって課題に取り組んだりできる時間も残りわずかとなり、寂しい気持ちでいっぱいです。4年生になると講義数が減っても、就職活動や実習、国家試験に向けた勉強などやるべきことが多くあります。2年生のうちから、勉強の積み重ねも大切ですが、近くにいると友達との時間も大切に、終わりがあ

る大学生生活を悔いなく過ごしてほしいと思います。人それぞれ夢や希望を胸に抱いて天使大学に入学し、それを実現するため今日まで多くの努力をしてきたと思います。理想の管理栄養士になるため、無難に大学生活を終えるのではなく、多くの人と関わって多くの価値観を学び、日々成長していきましょう。



今できること



栄養学科4年
竹田 ほなみ

2年生の皆さん、ステップアップセレモニーを終えて、管理栄養士を目指す決心はできましたか。もうすでに進みたい道がはっきり決まっている人もいれば、まだぼんやりとしている人もいます。まだ目標が決まっていない人は、時間がたくさんあるこの時期に、自分は将来どうなりたいかを真剣に考える時間を是非作ってください。人は目標があると努力することができます。その目標を見つけるために、まずは自分の興味の有無に関わらず、様々な分野の職業に触れてみると良いと思います。

勉強については、本格的に国家試験対策を始めた時に、基礎知識があるか無いかで大きな差が出ます。未来の自分を助けるとして、今は1年次・2年次で習った分野の復習や基礎固めをしてみてください。私は、それを怠っていたため4年次になってから復習に時間をとられ後悔しました。分からないことを放置せず1日数十分でもいいので毎日机に向かう習慣をつけてほしいです。最初は「やらされている勉強」でも、

だんだん楽しくなってくる瞬間が必ず来るので頑張ってください。また、余裕のある人については、すでに履修が終わっている科目の過去問に取り組んでみると出題傾向を把握することも出来るので良いと思います。色々な参考書や問題集に手を付けるのではなく、1つのものを繰り返し取り組む方法をおすすめします。

今年度は新型コロナウイルスの影響で生活が大きく変わり、会いたい人にも会えず、行きたい場所にも行けず、不安やストレスを感じている人が多いと思います。しかし、悲しいことや我慢ばかりの今こそ、前向きな気持ちを持てると、どんな環境でも頑張れる人に成長できると思います。この状況がいつまで続くかわかりませんが、ルールを正しく守ったうえで「楽しみ方」を見つけ、友人や家族、先生方と支えあいなから自分の目標に向かって頑張ってください。皆さんの活やくを祈っています。



3年次生、2年次生に今年度を振り返って執筆していただきました。

この1年を振り返って

我慢と発見の1年 - この状況だからこそ気づき、学べたこと -



看護学科3年
中坪 悠佳

4月の初め、始業の日が延期になると知ったときはまだ、このような大変な状況になることなど予想しておらず、友達と「長い春休みだね」と言って笑って話していたことを思い出します。大学生活4年間の中の、先生方や仲間と過ごすかけがえのない1年が、心から大学生活を楽しむことが難しい1年に

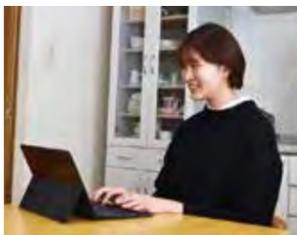
なってしまったことを本当に悔しく思います。

ほとんどの講義がオンラインでの実施となり、実習は約2週間の病院実習と約2か月間の遠隔実習となりました。病院実習は短い期間になってはなってしまったものの、2年次の実習を終えてさらに深めてきた学習と実際の看護実践を結びつけることのできたものになりましたし、遠隔実習では、先生方が一人ひとりの看護展開についてマンツーマンで指導してくださり、自分に不足している部分を見つけ改善していくことが出来ました。講義では、3年生になったことでグループワークの内容も難しくなっていくとともに、その検討をオンラインでのグループワークで共有することはとても

難しいものでした。しかし、このような状況の中でも、一人ひとりが積極的に学ぼうという姿勢、また先生方のサポートもあり、たくさんの学びを得ることができたグループワークになりました。

また、就職や国家試験を控え、仲間と情報共有もしづらいうこともあり、それぞれ不安も大きかったのではないかと思います。それでも、たくさんの時間の中で自分を見つめなおし、自分の今までとこれからについて改めて考える事が出来ました。

そして、大学の先生方や事務の皆さんは、毎日状況が変わっていく中で、私たち学生が円滑に学習できるよう、ご尽力くださいました。また、自宅での学習には、家族の協力も不可欠であったと思います。この場を借りて感謝申し上げます。この状況が一刻も早く落ち着き、また、1年後、悔いなくそれぞれの進路に進めるよう、家族、仲間、先生方と過ごす、限りある時間を存分に楽しんでいきたいです。



オンライン授業の様子

～新しい日常における学校生活～



看護学科2年
喜納 彩茶

今年は新型コロナウイルスの影響で思うように活動ができない日々が続きました。一年生最後の登校日、私は学年で最後のテストを終え、友人たちとも別れを告げて春休みを迎えました。しかし、私の春休みは新型コロナウイルスの影響を受けてなかなか終わりを迎えませんでした。友人にもなかなか会うことができず、個人で受験の申し込みをしていた韓国語能力試験も中止になるなど、自分のなかで計画していたことがなかなか実行に移すことができずしてました。また、「本当なら今頃は授業を受けているのか」と考えると焦りや不安が募っていきました。5月頃にやっとオンラインでの授業が始まりましたが、パソコン越しに先生やクラスの仲間の顔を見た時にとっても安心したのを覚えています。オンライン授業は課題の量が多く、先生によっても提出方法が異なるので様々な課題が重なるとそれらを識別し、計画的に行う必要がありました。また、私の家から大学までの通学時間は1時間ほどであり、登校するにはバスや地下鉄などの密閉された空間を強いられることから、感染リスクを抑えるために、少

ない対面授業の日程に合わせて課題を取り組むのに必要な文献を学校の図書館で探すなどの工夫も必要でした。本来なら私たち2年生は2週間の基礎看護学臨地実習と1週間の老年看護学臨地実習を行う予定でした。しかし、実際に患者さんと対面することができたのは基礎看護学臨地実習の2日間のみで、残りの日程はオンラインで事例についてのアセスメントを行ったり少人数でグループワークを行いました。このわずかな2日間で自分の実践力が身につけているのか、また、卒業までこのような状況が続いてしまうのかなど、不安に思うことが多いのも事実です。しかし、このような生活の中で得たものがあることも事実です。感染を予防するための消毒やマスク、人混みを避けるといった行動や課題を正確にこなす計画的な生活、また、オンライン授業や外出をしない時間の中で自分の目標や課題に向き合うこともできました。このような生活がいつまで続くかはわかりませんが、これらの得たものをより深く、これからの生活に役立てていきたいと考えています。



新棟エレベーター前にて

オンラインを駆使した日々



栄養学科3年
佐々木 梢

今年は、新型コロナウイルスの影響を強く受けた一年でした。旅行に行ったり、友達に会うなど、今まで当たり前でできていたことができなくなるとは考えたこともありませんでした。

オンライン授業が始まってすぐの頃は、Zoomの使い方がわからなかったり、授業を受けようとコンピュータを開くと、回線の調子が悪く繋がらないことがあったり、戸惑うことも多くありました。また、対面授業なら隣にいる友達とプリントを見せあって、すぐ相談できましたが、オンラインになってからは、写真を送りあうなどの手間があり、他のグループの進み具合などを把握しづらくなりました。しかし、オンラインになったことで、聞き逃したり、メモをとり切れなかったところを何度も聞けるようになりました。対面授業の時よりも、聞き間違いや覚え間違いを減らすことができた点は良かったと思います。今後もオンライン授業が続くと思いますが、わからないことをわからないままにせず、その都度質問していきたいです。

給食経営管理論実習Ⅱでは、福祉施設に行つての実習はできません

でした。実際の現場がどのようにになっているかははっきりとイメージを持ちづらかったことは残念でした。

臨床栄養学実習Ⅲは、病院での実習を行うことができましたが、コロナの影響で、見学できる栄養指導に制限がありました。しかし、栄養指導が見学できない分、症例を使って栄養指導のポイントを詳しく説明していただいたり、NST回診を見学させていただくなど、とても充実した10日間を過ごすことができました。

実習が終わった頃から、進路について深く考えるようになりました。初めは、就職活動の方法がわからず、不安でした。しかし、就職相談室に相談したり、空きコマの時間を活用して、就職情報サイトの就活準備講座などを見ていくうちに、自分以外の就活生も不安に思っているとわかり少し安心しました。また、自分の強みを就職の場面でどのように生かしていけるかイメージすることができました。

4年生になると、就職活動や国家試験の勉強が本格化していきますが、コロナを言い訳にせず、今後も頑張っていきたいと思えます。



友人達と就職の相談

「早すぎたこの一年」 - コロナの猛威 -



栄養学科2年
中田 彩加

この一年間は誰も予想がつかなかったであろう、「新型コロナウイルス」により日常生活が一変した。コロナの流行が約一年を迎えようとしている今、未だにこの現状を受け入れられていない自分がある。テレビに映っている人達が距離を取って話している様子やニュースで世界各地の皆がマスクをしている光景を見ると、その度に「あ、これが現実なのだ」と何度も思い知らされる。私達の大学生活においても、遠隔授業になり部屋で一人黙々とパソコンと向き合う日々となってしまった。毎日早起きをして眠い思いながらも身支度をし、大学に着いたらおはよ〜と友達に挨拶をし、休み時間になったら他愛もない話をして盛り上がり、...といった一年生の頃とは本当に変わってしまった。笑って、楽しい毎日がずっと続くと思っていたのに、とても悲しい。実習や実験が実際にできなくなってしまった講義があり、また困った時に相談のできる友達も近くにいない。孤独を感じながら過ごしたということが一番つらく、大変だった。果たしてこの一年間での勉強が

きちんと身に付いているのだろうか？ どんなに頑張っていたとしてもこのことが心配になってしまう。私達二年生は、細菌についての講義もありコロナの恐ろしさや感染予防の大切さをより実感した。そして、もう少しで学外実習も始まろうとしている。知識面、技術面において実習先でついていけるのか、不安で仕方がない。いつか終息したら毎日大学へ行って授業を受けたい。そして話す距離を気にせず、たくさん話したい。その反面もしかすると、このような状態で大学生活が終わってしまうのではないとも思ってしまう。一番この一年間が最も早く過ぎ、何かを頑張った、やり切ったと思うことも無い、中身の薄い年となった。当たり前だったことがある日突然当たり前ではなくなる、そんな受け入れ難いことが今まさに起こっており、大切な何かを身に染みて感じている。一日でも早くマスクを付けずに会いたい人とすぐに会える、今までの何気ない日常に戻りたい。



対面授業の休み時間に



（第16回）
本学教職員による
リレーコラム

2020年を振り返って

2020年は新型コロナウイルス感染症のパンデミックの年として、私たちの記憶に長く残ることになるでしょう。そして、東京オリンピックが延期となった年としても。私は、オリンピックの試合をテレビで観戦するのが好きです。テレビを通して応援した記憶が残る1976年のカナダ・モントリオール大会から、夏のオリンピック開催地をそらで言える程度にです。やはりオリンピックは特別なもので、4年に一度のそのチャンスに賭ける選手の姿、自身の選手としてのピークをそのチャンスに合わせる努力とひたむきさ、率直に毎回感動を覚えます。そのオリンピックが延期となり、私はすぐに1980年のモスクワ大会を思い出しました。旧ソビエト連邦のアフガニスタン侵襲に抗議し、西側諸国がボイコットした大会です。金メダル候補者を擁する日本選手団も不参加となりました。出場予定だった選手たちの無念さは大変なものだったでしょう。しかし今回は、2020年に自身のピークを合わせた全世界の選手が無念な思いをし、さらには試合を見守るはずだった私たちまでもが一変した日常生活に対する不安の中に身を置くことになりました。自国開催のオリンピックイヤーになるはずが、これほどまでに違った1年になるとは...

看護学科教授 大野 和実

一方、2020年は本学にとっても記念すべき節目の年でした。それは、天使女子短期大学から改組転換により天使大学となって20周年を迎えた年だったからです。さらに、完成した新棟(2号館)を学生の皆さんが大いに活用することが期待されていました。しかしながら、感染予防のため従来通りには講義や演習を行うことができません。多くの学生の声で賑わうことが未だありません。寂しい限りです。このような状況は教員になって初めての経験ですが、看護学科4年生の前期(5~7月)の臨地実習が全面中止となったこともまた、初めて経験することでした。そして、リモートで教育を続けるべく、新たな教育方法の模索の日々が続きました。人との距離をとる必要がある現状の中で、看護実践の学習の積み上げを学生にどのように経験してもらおうか、コロナ禍で苦しい思いをしている学生のフォローをどのように行っていくかが今後難しい課題となります。しかし、それらを次に向かう新たな経験、チャレンジとして前向きに受けとめたいと思っています。私はいつの頃からか、「何事が起きても、それを受けとめるだけの大きな心が持てますように」と願うようになりました。今こそ、そうありたいと思っています。

活躍する卒業生

栄養職を目指す方に知っておいてほしいこと

「～自分と家族との経験を通して～」～自分自身で道を切り開く選択～

栄養学科卒業(2009年度)
大竹 友里恵(旧姓:角田)



私が栄養学科や天使大を目指した理由は、元々は祖父が食品科学の関係者だったこともあり、食品科学を学べる大学を希望していました。ただ、当時は持病の治療をしていて、通学に時間がかかる所には不安があったこと、母の勧めもあり、資格を取得でき、食品科学と関係がありそうな栄養学科に視野を広げ、天使大を受験することになりました。恥ずかしながら、当時はどうしても管理栄養士になりたい! という強い目的はなく、入試の面接練習をするまで栄養士と管理栄養士の違いも分からないような、そんなスタートでした。

もう一つ決め手となったのが、合格通知が早く送られてきたこと。噛みたいですが、合格発表の前に通知が届いて、「これは縁があるのかもしれない!」と入学を決めました。

栄養学科は、管理栄養士になるための専門科目が充実しているのは勿論ですが、人を中心に考える学問やカリキュラムが充実していると感じていました。特に生物学やコミュニケーションを考えるゼミや教養科目が大好きでした。印象深いのは「生涯発達論」や「人間学」。生涯発達論は、身近な人のライフステージを研究してレポートにしたり、人間学はLGBTや多様性など各テーマをグループごとに調べたり。人とは? 生きるとは? と答えのない問いを考えるのが今でも好きです。

建学の精神である「愛とおして真理へ」。これは在学中より今、日々の暮らしや生き方に息づいていると感じています。栄養相談をするにあたり、色々な方に心を寄せることに、とても役立っています。入学時から方向性を決めていた友人達と違い、進む道が分からなかった私は、大学4年間で、興味のある分野を見つけておこうと思っていました。何でも興味がある性格で、就職を考える時期になっても迷って決められず…。当時興味があったのは、企業、食品衛生監視員(卒業論文はサルモネラの研究)、栄養教諭、病院の管理栄養士(臨床や形態機能学が大好きでした)。その中から、一番早く内定を頂き(卒業研究と国家試験の勉強に専念したかった)、自分が働くイメージがしやすい製薬企業のMRを選びました。選んだ理由のもう一つは、慣れ親しんだ北海道の外に出たかったこと。小学校実習に行った際、子どもたちと接する中で自分の思っている環境に疑問を持ち、もっと厳しい環境に身を置きたい、世間のことを知りたいたいと思うようになりました。実習先の先生から「ここは社会の縮図。子どもたちと愛をもって接してあげてください」と言われ、色々な家庭環境の子どもたちと関わったこともきっかけになりました。MRの仕事は、最近のドラマでは「私の家政婦ナギサさん」の多部未華子さんがイメージしやすいでしょうか。消化器疾患、肝臓病、がん等、医療従事者と話をするのに、大好きだった形態機能学や臨床栄養の知識が役に立ちました。栄養剤や輸液も扱っている会社だったので、輸液の処方の方や等、若い薬剤師さんや看護師さん向けに勉強会をしたこともありました。

その後、結婚・出産をしました。息子は先天性の食道疾患があり、食べ物を噛んで飲み込んだ後も、胃の方になかなか落ちて行かない、食道に詰まりやすいという特徴があります。2歳のころの息子のごはんは、大人のごはんをミルサーにかけたペースト食。毎回の食事がプレッシャーで、段々と作るのも、食べさせるのも、自分自身が食べるのも怖くなってしまいました。困りごとを身内にも他の誰かにも知ってほしいと思い、SNSで発信を始めます。とにかく誰かに助けてほしい、息子の食事作りを代わってほしい…。そんな時、管理栄養士マッチングサイトを立ち上げるとSNSで発信。管理栄養士が沢山いたら、1人くらい我が家の状況を理解し、助けてくれる人が見つかるかもしれないという思いから、クラウドファンディングに協力。そこからオープニングスタッフをやらなにかと声がかかりました。3年間、そのサイト内でコラム書き、管理栄養士仲間と様々なプロジェクトに取り組みました。(保育園食育講座、管理栄養士のワンコインナック、YOUTUBEチャンネルなど)。そこで出会った全国の管理栄養士との横の繋がりは、今でも切磋琢磨しあう大切な絆です。自分のために始めたSNSが自分自身の可能性を広げることに繋がったり、同じ疾患を抱えるママさんや知り合いの目に留まるようになり、「管理栄養士」ということで相談を受ける機会が増えていきます。必要としている人が沢山いることを実感します。ダウン症だけでなく、様々な疾患をもったママさんとも繋がりました。難病には詳しくなかったので、調べてみると、てんかんやGlut1欠損症には糖質制限食が必要だったり、自閉症には一時的に小麦や乳製品を制限するのが有効だったり。食べられない子どもは微量元素が不足して皮膚炎になりやすかったりと、臨床栄養の知識を生かして話を聞けることが分かってきました。出会いを通じて、改めて分かったのは食べるのは当たり前でないこと、難しいこと。もっと病院の外にもいる支援を必要としている子ども達やお母さんの力になりたい。私一人では足りないのも、もっと仲間を増やしたい、そう思うようになりました。

発達に凹凸のある子ども達や息子がお世話になっている療育センターでは、理学療法士、歯科医、作業療法士、栄養士、活動や遊びなどには保育士の先生、医療的ケア児もいるため、看護師さんが常駐しており、多職種の方が家族のサポートもして下さり、心強い存在です。そこから段々と通院なども減り、地域で生活する時間が長くなっていくと、相談する場が限られてきます。

一人ひとり、お口の発達にも個性があります。低緊張のため長時間同じ姿勢を保つ

のが難しいこと、手術や先天性の疾患によって長期に入院したり、経管栄養を併用していたり、食べることにハードルがあること。口の構造が食べるのに難しい形をしていること。普通の離乳食本通りに進まないこと。偏食になるのも口腔過敏があったり、食べ物の受け方が特殊だったり、「食べることは当たり前!」だと思われがちですが、そうではないと分かってくれる人を増やすことも必要です。学校や地域で専門職が介入したり、情報共有をしたりして、家族や子ども達が安心して過ごせるような工夫も必要ではないかなと思います。

息子は2021年度、就学します。幼児食を食べられないので、専門家に学校との間に入ってもらい、給食の食形態はどうしたらいいのか? 座る椅子は? 食べる際に見守りは必要か? など話合う必要があります。これ以外にも学童期以降、青年期以降、健康に関する問題が出てきたとき、家庭での困りごとを支援先とどう情報共有するのか、支援を受けていくのか。あちこちとやり取りするのも母親の情報の取り回し、動き方次第になってしまうことが多く、主に育児を担当する母親に負担が大きいのが現状です。母親の負担を減らしたい! これも多職種連携が必要なことだと思っています。

歯科医師の講義を受講した時、「お食事は、子どもたちの食べる力をつけてあげるための、食形態をステップアップするための教材」をいうお話がありました。食事の指示を出すのは医師、どんな形だったらよいか、評価するのは言語聴覚士、どのような食形態だったらいいか、適切な形で用意するのは管理栄養士。病院の外でも専門家がそれぞれ得意分野を生かせば、お母さんもおもつと気持ちも楽に、家族で安全に楽しく食事を楽しめるのではないかな、と思います。

皆さんは卒業後、どんな場どのように活躍したいでしょうか? それは何故でしょうか? 病院、高齢者施設、委託給食会社、保育園、学校、歯科、行政、企業、栄養ケアセッション…色々な選択肢があると思います。私は学生時代、ずっとフルタイムで働き続けること、まずは3年、進む道を決めなくては、と思っていました。ところが、途中で体調を崩し退職をしました。息子が生まれてからも、もうどこかに勤めてフルタイムは難しいだろう、そう思っていますが、今はそれが良かったと思っています。興味のある分野を、管理栄養士を必要としている未開拓の場を開拓したいということ、どう働きたいか、どう生きたいかということを考えるきっかけになりました。息子がつないでくれた縁がきっかけでくれた大事なことです。まだまだ、小児の食べることを支える専門家は管理栄養士に限らず、不足しています。それは、就職先が少ないため、裾野が広がりにくいため、学ぶ機会が少なく、支援を必要とする保護者や子ども達に出会うことも少ないと聞きました。ただ、必要としている人はたくさんいます。どこで支援を必要とする子ども達に出会えるのか、という保育園や幼稚園、小学校の特別支援学級、大学病院の小児科やこども医療センター、子育て支援センター、行政の栄養相談、療育センターや児童発達支援事業所、摂食指導がある歯科など。

息子と一緒にいるうち、ここではこんなことが出来そう、ここは管理栄養士が繋がったら助かる保護者の方が多いな、と思う場が沢山あります。私自身、息子の困りごとを勉強しているうち、少しずつ世界が広がっていきました。小児科の先生の偏食についての講演、歯科の先生の食べる機能の発達講演を聞いて、障がい児の親の会でまとめてシェアしてみたり、お勧めの本を購入したり、療育センターの先生に教えていただいたり。息子が繋いでくれたご縁のおかげで、行政で働いたり、障がい者施設で働いたりしている同業者から相談されることも多くなりました。福祉型大学で講師業をするようになったのも、先輩ママさんからの紹介です。一度キャリアが途切れたとしても、新しく学び直したり、社会に還元する方法を考えたり、自分自身の道を開拓する選択肢があってもいいのではないのでしょうか。

学生時代には気づけなかったことですが、他にもまだまだ可能性のある分野はたくさんあります。私のように、学生時代に方向性を決められなくても、色々な方の話を聞いたり、自分の目で見て、走っているうちに、得手不得手や好き嫌いが分かってくる。どうか、自分の気持ちに正直に、「何故やりたいか?」を大事に、やれること、ワクワクすることを見つけて下さいね。そして、もし子どもの食べることの発達に興味を持って下さる仲間がいれば、一緒に歩いていけたら嬉しいです。

プロフィール

2009年4月、味の素ファルマ株式会社(現EAファーマ株式会社)入社。MR(医療情報担当者)として東京第一営業所所属。がん(血液内科、歯科口腔外科、消化器外科等)消化器内科、肝臓病、膠原病などの難病、消化器疾患をメインとするDr.や、医療従事者年間900名ほどに医療情報を提供。勉強会等実施。2013年8月、退職。

2014年、先天性食道閉鎖症、ダウン症がある息子を出産。育児中に自身の体調を崩したことをきっかけに、薬膳や中医学、ホリスティック栄養学をオンラインで学び、健康や幸せには食だけでなく心と身体、人間関係など周りの環境が関わっていることを知る。体質や体調、環境に合わせた食選びやセルフケアが必要だと気付く。

息子を出産し、子育ての中で経験した食べることの難しさや形態食作りの負担から、SNSを通して情報発信。同じ境遇のママさんたちへ安心感や繋がりを提供し、そこから繋がった障がいのある子どもや、保護者のための栄養相談も好評。現在は、福祉型大学ゆたかカレッジにて、障がいのある学生さん達の調理実習、ヘルスクア講師業の他、食コラム、障がい児の学びや就労を考える場に参加する等、育児の傍ら積極的に活動中。



あなたの声をお聞かせください

天使大学報「天使」では、読者のみなさまの声を生かした誌面づくりを目指しています。ご意見、ご感想、取り上げてほしい話題等ございましたら、下記あて先までお寄せください。

あて先/〒065-0013 北海道札幌市東区北13条東3丁目1-30 天使大学広報委員会 tel.011-741-1051 fax.011-741-1077



天使大学

看護栄養学部/看護学科・栄養学科
大学院/看護栄養学研究所
助産研究科(専門職学位課程)

第30号 2021年3月1日 発行 天使大学広報委員会

<http://www.tenshi.ac.jp>